

さる6月18日、東京都・世谷田の加藤清二郎氏(78=能登出身)宅で、名誉市民証の伝達式が行われました。

式典には、吉沢市長、川田市議会議長、小林(良)名誉市民審議会長がおもむき、同氏に吉沢市長から額入りの名誉市民証と記念品、推薦記録が贈られました。

そこで、人柄などを紹介し『郷土が誇るりっぱな人』として、親から子へと伝えて行こうではありませんか……。【6月15日号『広報しろねおしらせ版』に業績などを紹介】

名誉市民 加藤清二郎氏

たい努力と業績

こみあげる終生の感激

一言御礼のご挨拶を申し上げます。顧みまして私は、少年時代から自分で事業を起こすことを志しまして、鬱勃たる雄心押え難

く、進学の道も棄てて、若くして生れ故郷を離れました。そして中途で軍隊に入隊するなどのこともありましたが、思

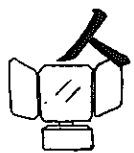
耐えたと思われる苦勞を重ねた末、二十五歳の時には、念願とした自分の事業を創業する運びになりました。以来、五十余年、私は事業経営一筋と申しますか、事業と共に生きて参りました。順風満帆のときがありました。また大変な苦難も幾度か経験いたしました。殊に、太平洋戦争の戦火によって八十九ヶ店あった店舗の殆んど全部を失い、残ったのは僅か五ヶ店という惨憺たる有様に落ちこみました。その壊滅的な状況から立ち直り、復興を成し遂げる苦しみは誠に言語に絶するものがありました。死ぬ思いをいたしましたのであります。波乱万丈の歴史であったと申すことが出来ましょう。

また、私は現在、東京新潟県人会の会長をいたしておりますが、県人会に入会いたしましたのは、確か私が須田町食堂を創業いたしましたから三年目の、二十八歳のときであったと思っております。五十年の会員歴であります。入会いたしました動機も、また永い間、副会長、さらに会長として会のお世話を続けてきて居りますのも、その心の発するところは、畢竟、故郷を思う気持ちに外ならないものと思えます。私を生み、哺んでくれた、私にとっては、かけ替えのない大切な生れ故郷であり、心から愛して止まぬ白根市から、このたび「名誉市民」という榮譽ある称号を賜りましたことは、終生の感激であります。一家一門の光栄これに過るものはないと存じます。本日は公務ご多端の中を遠路わざわざ伝達のため、ご来駕賜りまして、ご懇情のほど、厚く厚く御礼申し上げます。誠に有難うございました。昭和五十一年六月十八日 加藤清二郎 【原文のまま】



郷土の誇り

語りつぎ



生家は「材清」の屋号で材木商を営み尋常小学校を卒業後、海産物問屋へでっち奉公。サハラン(滝太)で鉄道建設に従事。土方、住み込み配達夫などをへて、大正十三年三月「帝都」に「簡易洋食」のノレンをかけた大衆食堂を開く。以来、食堂・ホテルの「聚楽チェーン」をはじめ、観光事業などを経営「日本の食堂王」と称される。

郷土の発展に寄与

私がここまでこられたのも、郷土あってのお蔭です。いくたの困難に出合うたび、ふるりの景色や知人、友人を思い浮かべ、それを支えに血のじむ努力を重ねました。長男(加藤健一郎氏)である副社長の前は、白根に育った者でないため、父がふるり「白根市」を思う心を十分に理解しえないだろうが、しかし、父が

なりを語る

浪曲に涙した社長

(歌手) 三波春夫

かわり、いつまでも郷土のために尽くしてほしい。このことを父の私から、長男の前にも、心からお願いをしておきます。また、私が健康であるうちに郷土のお役に立つことができるよう、お前も努力してほしい。【加藤家ご招待会あいさつから】

じゅらく——加藤社長と私を書くことになる、数百枚を費やしても書きつくせない。社長は、私にとって人生の師であり、恩人である。ある時は芸で、ある時は仕事で、ある時はすべてを離れて、しみじみと深い人情の淵に身を沈めること

を会長に依頼すべきではないだろうか」と、いわれたことがある。「とんでもないことです」と、否定する私にしみじみ「そうか、それは光栄なことだ」と、ニコリ頭を下げられた時私は思わず涙がこぼれた。こんなおくゆかしい後援会長が、世界中のどこにおられようか。こんなにも私を愛して信じてくださる加藤社長に生涯、後援会長をつづけていただきたいと願っている。

二十二年間も後援会長を務めていたが、ある時「三波君は大きく成長したのだから、私よりもっと日本的な人物

聚楽こそ尊敬する加藤社長そのものだ」と信じている私です。【本文は、昭和四十九年十二月十日発行の『聚楽50年のあゆみ』から】

